

鷺見保明「秋の道草 上」翻刻 —— 稲葉文庫と橘千蔭・衣川長秋の添削 ——

文学研究科国文学専攻博士後期課程満期退学 大内 瑞恵

はじめに

東洋大学附属図書館に山本嘉将氏（一九〇八～一九九二）の旧蔵書（近代資料を含む）一三八三点が稲葉（とうよう）文庫の名称で蔵せられている。氏は『香川景樹論』（一九四二年 育英書院）、『近世和歌史論』（一九五八年 文京図書出版、一九九二年 パルトス社再版）、『加納諸平の研究』（一九六一年 初音書房）、『賀茂真淵論』（一九六三年 初音書房）などを出版し、未だ研究の進展していない近世後期和歌研究に先鞭をつけた研究者である。

『加納諸平の研究』序に、昭和三十四年（一九五九）に東洋大学に博士論文『加納諸平の研究』を提出し、三十五年に学位授与式が行われたことが記されている。この縁から東洋大学附属図書館に稲葉文庫が置かれたが、この蔵書には氏のなみなみならぬ蒐書と研究への熱意が如実にあらわれている。そして、そのままこの蔵書は近世和歌の貴重な資料群となっているといえよう。

稲葉文庫は、（一）香川景樹関連書目、（二）加納諸平関連書目、

（三）鳥取藩鷺見家関連資料などから構成されている。これには、江戸時代後期の鳥取藩の国学・和歌資料として写本や書簡が多く含まれ、本居宣長没後の国学者たちの動向が示されている点など、興味深い資料が多い。江戸後期国学者および鳥取藩関係者の書簡がおよそ三百五十点稲葉文庫には所蔵されていることは注目される点である。

この蔵書にはマイクロフィルムも含まれている。これは、東洋大学に稲葉文庫が置かれる以前、昭和五十年（一九七五）七月に稲葉文庫（山本家）へ国文学研究資料館が調査に入り、六三五点の資料の撮影が行われた。現在、そのマイクロフィルムは、国文学研究資料館において公開されており、閲覧が可能である。ただし、現在東洋大学附属図書館で所蔵する稲葉文庫とこのマイクロフィルムの内容が完全に合致しているかという点、そうではなく、国文学研究資料館のマイクロフィルムでのみ確認される資料、東洋大学附属図書館蔵稲葉文庫でのみ確認される資料なども存する。

この文庫資料について順次報告したいと考えているが、本稿では特に紀行文とその添削過程に注目し、まずは、鳥取から江戸までの旅路の和歌を記した「秋の道草 上」およびその添削部分を翻刻し紹介したいと思う。

一 鷺見文庫

稲葉文庫の特色の一つに、鳥取歌人の資料群がある。なかでも、鷺見家関連資料が多く、これは鷺見文庫の一部であろうと考えられる。鷺見文庫とは鳥取藩池田家に仕えた鷺見家伝来の資料である。山本嘉将氏は前述『近世和歌史論』などにおいて、この鷺見家の文庫の一部を紹介しておられたが、五十年を経て各地の資料や国学者達の動向が明らかになるにつれて、その位置付けを見直す時期に入っているといえるだろう。

江戸時代後期、十八世紀から十九世紀にかけて活躍した鷺見保明、安喜の父子は和歌・国学に熱心で、各地の国学者・歌人と交流を持っていた。鷺見安喜はのちに「安歎」と表記を改めるが、本稿では「安喜」の表記で統一することとする。

『和歌文学大辞典』（二〇一四年 古典ライブラリー）に鷺見保明・安喜父子は次のように記述される。

○保明 やすあきら〔江戸時代後期歌人〕

鷺見。名は慶明・休明とも。字は子休。通称は新助・権之丞。号淡成舎・忘言亭。寛延三（一七五〇）年〜文化五（一八〇八）

年十一月八日、五九歳。鳥取藩士。安藤箕山に漢学を、両親に歌学と和歌を学ぶ。衣川長秋らと交遊を結ぶ。『鷺見翁家集稿』『鷺見休明遺稿』『鷺見慶明詠草』など。九州大学文学部に草稿類が残る。（白石良夫）

○安喜 やすよし〔江戸時代後期歌人〕

鷺見。幼名、保喜。晩年は安歎と称す。通称、勘解由。天明四（一七八四）年五月二六日〜弘化四（一八四七）年三月二三日、六四歳。休明の長子。鳥取藩士。一六歳で尚徳館に出仕し、教鞭を執る。儒学を学び、また衣川長秋に師事し国典に詳しくかつた。藩政担当の傍ら、国学和歌併修に努め、本居大平・加納諸平・伴信友をはじめ多くの学者と交流があり、殊に紀州の諸平とは、ともに自藩内に国学館の設立を企図するなど親交が深かった。父休明の遺稿を『鷺見翁家集』としてまとめた他、『かたこと歌』五十数冊を初めとする多くの草稿類が残る。【参考文献】『近世和歌史論』山本嘉将（文教図書出版 一九五八、復刻 パルトス社 一九九二）（高松亮太）

さて、両解説に見られるように、この父子には草稿が多く残されているが、九州大学文学部のみならず、稲葉文庫にも草稿類が残されている。たとえば、衣川長秋による添削を経た草稿などである。

保明と交遊し、安喜の師として記される衣川長秋は、明和二年（一七六五）〜文政五年（一八二二）を生きた国学者で、本居宣長・春庭を師とし、鳥取の衣川家を継ぎ、藩の国学教授となった人物で

ある。

稲葉文庫資料だけでも、驚見父子が何かと衣川長秋に添削を仰いでいることがわかる。具体的には次の資料などがある。

保明「享和二年戌のとしのうた」衣川長秋添削。

保明「享和三亥のとしの詠草」衣川長秋添削。

保明「あきの道くさ」加藤千蔭・衣川長秋添削。

安喜「堀川百首の題にてよめる歌」第二稿

(三冊合綴のうち第二冊) 衣川長秋添削。

安喜「衣川長秋添削稿ほか」安喜歌を長秋が添削したもの。

また、衣川長秋は安喜に、当時の著名な歌人評を伝えた「歌人評」や、鳥取の門下について「衣川長秋」書簡(文政年間門下人物評)などを記している。

稲葉文庫に長秋の自筆書状は十点。

- (一) 一卷(巻紙仕立、書状十一通と添書) 文化文政頃か。
- (二) 一通(門下人物評)
- (三) 一通(年賀状)
- (四) 一通(文政五年)
- (五) 一通(文政五年)
- (六) 一通(十一月十二日)
- (七) 一通(文政五年)
- (八) 一通(年代未詳)
- (九) 一通(文政五年)

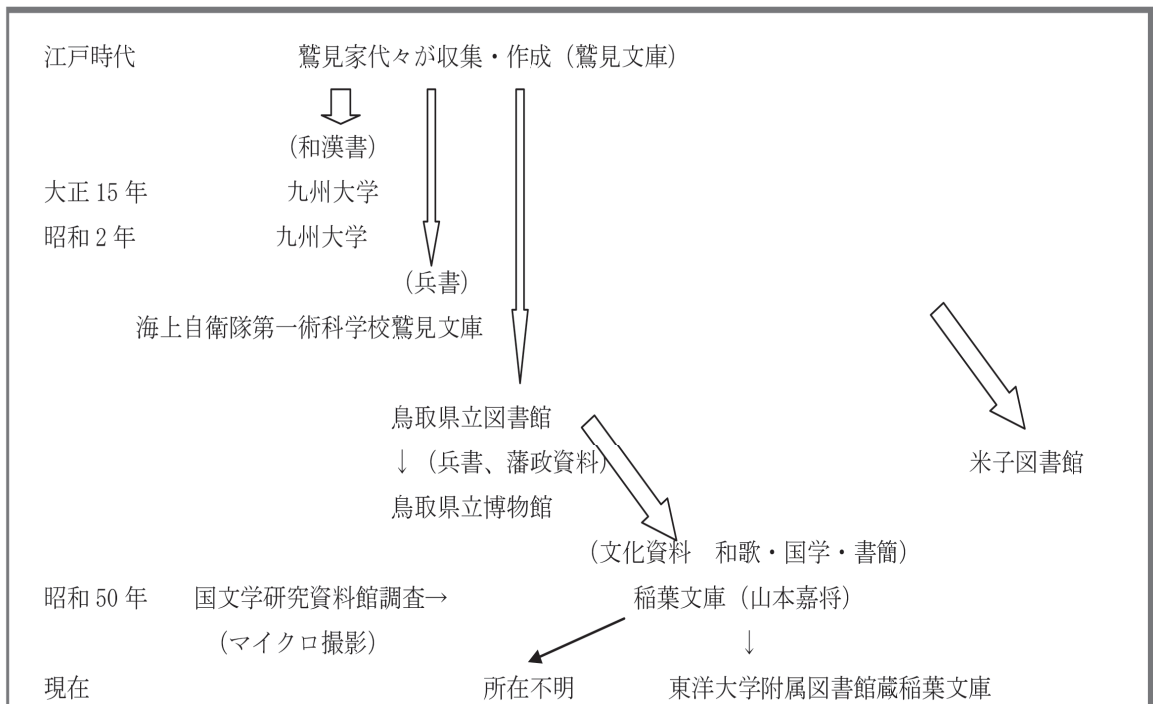
(十) 一通(文政六年正月)

これらの添削資料や書状からは、驚見父子が和歌・国学を学ぶとともに、鳥取藩内の学問の情報なども得ていた様子を垣間見ることができる。例えば、衣川長秋の書状のひとつ(六)には鳥取藩出身の医師、稲村三伯の改名の噂などが記されている。

稲村三泊は、宝暦九年(一七五九)に生まれ、文化八年(一八一二)に没した蘭学者・医師で、蘭日対訳の辞書である『波留麻和解(はるまわけ)』を記したことで知られる人物である。この書簡に年次は記されていないものの、長秋から「十一月十二日」付で送られた書状には「稲村何某改海上」と、稲村三伯が海上と改名したことが知られている。これは、稲村三伯が鳥取藩を脱藩し、下総国海上郡に隠棲し、名を「海上随鷗」と改めた享和二年(一八〇二)以降のことかと推定できる。

衣川長秋から驚見保明への書状にはこのように当時の人々の情報がさまざま盛り込まれている。文政五年の書状には「京師も儒者国学者画家、書家とも無く大おとろへ」と其内がまだ古学者が有之方ニテ和歌者流も大おとろへ二候」と記されるなど時勢を気にしている様子も見られる。

このように驚見家の資料群は鳥取藩の文事のみならず、学問ネットワークを探るためにも興味深い資料が多い。この驚見父子が中心となって、集めた書籍と書簡、草稿群が驚見文庫である。しかし、この驚見文庫は近代に入り分散した。現在、さまざまな経緯のもと



に九州大学、海上自衛隊第一術科学学校教育参考館、鳥取県立博物館、鳥取県立図書館、米子市立図書館、東洋大学附属図書館などに所蔵されている。

九州大学に所蔵されている鷺見文庫の伝来については、田村隆氏「鷺見文庫点描」(二〇〇九年九州大学附属図書館研究開発室年報)に報告があり、一一七点三三七冊が九州大学に蔵せられており、九州大学鷺見文庫は、京都の竹苞書楼から大正一五年・昭和二年にかけて購入したものであるという。和漢書が多く、近年では、白石良夫氏により「鷺見文庫書誌覚書(下)―廉斎書留より(四)」(二〇一六年『雅俗』第十五号)など具体的な書誌報告が行われつつある。

ほかに、古兵書の目録として、『古兵書目録 旧海軍兵学校教育参考館蔵野沢文庫鷺見文庫』(一九六四年 海上自衛隊第一術科学学校普通学科・教材課)があり、こちらの鷺見文庫は広島県江田島市の海上自衛隊第一術科学学校教育参考館に所蔵される。また、藩政資料(和歌資料も含む)などが鳥取県立図書館・鳥取県立博物館に所蔵される。

これらの調査をもとに、現時点で確認できる資料の流れは図1のようになるかと考えられる。

このような広がりの中、東洋大学附属図書館蔵稲葉文庫に含まれる鷺見文庫資料は和歌・国学・草稿・書簡資料などが中心となっている。例えば、鳥取県立図書館に鷺見保明『吉岡の日記』が所蔵されており、鳥取市歴史博物館により翻刻され、樗谿叢書『姫君姉妹

吉岡温泉滞在日記』という絵入りの本が刊行されているが、その草稿資料が稲葉文庫に蔵せられている。また、九州大学図書館蔵書と鳥取・広島に残る資料との関連性も見渡す必要がある。このように鷺見家旧蔵資料群は各地に散在しているため、各地の資料のつながりを探ることが、そのまま江戸時代の文化的ネットワークの解明となるだろう。

二〇一三年に鳥取大学岸本覚氏・田中仁氏、鳥取県立博物館学芸員来見田博基氏などを中心に〈地方の知の系譜〉という「地域再生プロジェクト」が行われたが、現在の研究においても知の共有・ネットワーク化が必須であろう。

現在、井上円了研究助成を受け、東洋大学附属図書館稲葉文庫目録の報告書を準備中であるが、その一端として、本稿では「秋の道草」を紹介する。この作品は鳥取藩主の供として江戸へ往還した鷺見保明が記した和歌紀行文であるが、衣川長秋、橘千蔭という二人の歌人の添削を受けたものであり、当時の和歌の添削指導の実態を知る好材料といえるからである。

現代においても、東洋大学では通信教育課程を行っているが、江戸時代からその教育指導の基本が変わらず添削にあることは、学問のありようとして興味深い。

二 東洋大学附属図書館稲葉文庫蔵『秋の道草』

鷺見保明著『秋の道草』は写本二冊。縦二二糎、横十六糎の袋綴装。布表紙（入子菱文）、中央に書き題箋「秋のみち草 上」「あきの道草 下」。上巻十六丁、下巻二十二丁。上巻奥書は「享和元酉年九月／鷺見保明しるす」。享和元年（一八〇一、干支は辛酉）鳥取から江戸への旅路の詠草をまとめたもの。下巻奥書は「享和二戌年十月／鷺見保明しるす」。こちらは江戸から鳥取への旅路の詠草をまとめたものである。おそらくこれが清書本と考えられる。

享和元年当時の鳥取藩藩主は池田斉邦。斉邦は天明七年（一七八七）に生まれ、寛政十年（一七九八）に鳥取藩主となっている。藩主となってより在府（江戸）していた斉邦であるが、享和元年の二月に江戸から国元（鳥取）へ行き、八月になって国元から江戸へ出立したという、通常の参勤交代スケジュールとは異なった状況であった。そのせいか、保明は藩主に先だつて一日早い八月二十七日に出発し、九月十九日に斉邦とともに江戸に到着した。来見田博基氏「鳥取藩の参勤交代に関する統計的研究」（二〇〇五年）鳥取県立博物館研究報告）によると、鳥取藩の参勤交代時の日数は二〇泊二一日が多いようであるが、この享和元年の日数は二十六日（保明は二十七日）である。弱冠に満たない藩主の初めての往還であり、通常とは異なる状況であったのだろう。とはいえ、保明は五十路であり、道中で和歌を詠む余裕もあったようである。文中に登場する日程（行程）と地名・名所旧跡は次の通り。

八月二十七日 鳥取 出立

二十八日 知頭の駅（鳥取県智頭町）

二十九日 平福（兵庫県佐用町平福）

宇和津（兵庫県佐用町、上津）

三日月の駅（兵庫県佐用町）

晦日（三十日）柿本明神（人丸神社、兵庫県明石市人丸町）

明石

九月一日 須磨（兵庫県神戸市）

二日 昆陽（兵庫県伊丹市）

西宮（兵庫県西宮市）

伏見（京都府京都市）

三日 都（京都）・神泉苑

四日 ここより斉邦のお供

逢坂山（滋賀県大津市）

五日 三井寺

鈴鹿山（三重県）

六日 石薬師の駅・赤人旧跡（三重県）

七日 桑名より舟（三重県）

八日 佐屋（愛知県愛西市）

寝覚里・夜寒里・宮（愛知県名古屋市中熱田）

九日 池鯉鮒（愛知県知立）・八橋

十日 矢作川・豊川（愛知県）

十一日 高師山（愛知県豊橋市）

舞坂（静岡県浜松市）

十二日 浜松

十三日 大井川・岡部（静岡県藤枝市）

十四日 宇津の山・府中（静岡県静岡市）

十五日 有度浜・蒲原・岩渕・富士川・富士浅間神社

十六日 富士の山

十七日 三嶋明神（静岡県三島市）・大磯（神奈川県）

十八日 高麗寺村（神奈川県大磯）

十九日 江戸 到着

ここで、注目されることとして、知頭（智頭）や平福は街道筋であるが、柿本明神に詣で、須磨明石のあたりから歌枕を意識した詠草が続く。東海道に入ってから、伊勢物語を思い起こすように池鯉鮒（知立）で八橋の旧跡に触れている。途中、同行した次男の体調を案じたり、雨に悩まされたりするが、基本的には名所旧跡を逃さず和歌に詠もうという意欲が見られる。職務の旅とは言え、その記述の姿勢は中古中世の紀行文を意識したおどかなものであるといえよう。ここには、国学者としての名所研究ではなく、文学作品に登場する土地を歩くことによる追体験ともいべき喜びを感じる詠歌である。

そして、それらは二人の歌人によって添削された。佐屋の渡りて詠んだ歌「そら晴であけのそほ舟漕のぼるさやのわたりは見れどあ

かぬかも」は千蔭・長秋双方から「古体」と評されている。保明は「古体」の歌人であったのだろう。

その添削状況は上巻の詠草の草稿（添削）資料二点により見ることがができる。

(一) 橘千蔭添削「あきの道草 上巻〔稿〕」写一通

八月二十八日～九月十九日までの上巻全行程の添削。添削部分
は点による見せ消ち、書き入れは墨書。

橘千蔭は享保二十年（一七三五）生、文化五年（一八〇八）没。幕臣、歌人で、能書としても知られる。賀茂真淵の門人の一人であるが、村田春海と共に「江戸派」と呼ばれたことでも知られる。後述するが、宣長門の衣川長秋とは添削の視点が多少異なっている。

(二) 衣川長秋添削「あきの道草」〔草稿〕写二通

八月二十六日～九月十三日までの上巻全行程の添削。添削部分
は点もしくは傍線による見せ消ち、書き入れは朱書。
この三点を比較してみると次のようになっている。

① 九月三日の条

〈長秋添削〉 九月三日

まるのぼりて

都へ御使に参る堀川

ひ

といふ所にてかれないなど

ついで

とふへけるに近き辺り

なれば神泉苑の跡

まゐり

を見て

ののの向

いにしへのみそのなりしか池水に

龍の宮ゐは猶残りつゝ、

〈千蔭添削〉

三日

都へのぼり公卿方への

御使つとめしつゝで

神泉苑とて案内して

人の見えければ

のながれ

〇いにしへの御そのか今も池水に

それ

龍の宮居は猶残りつゝ、

〈保明写本〉

三日

都へ御使にまるのぼりて堀川

といふ所にてかれないひなどたふべ

けるついでに近き辺りなれば

神泉苑の跡を見まかりて

いにしへのみその、の池の水清み

龍の宮居は今も残れり

結論から言くと、長秋の添削を多く取り入れているものの、最終稿はバランスよくまとめられている。しかし、双方から細かく添削されたものは削除してしまうケースも多い。特に長秋はこまやかな添削を行い、ものによってはまったく異なる歌と変えてしまっている場合もある。そういった歌は削除してしまっている。

②九月十一日の条

〈長秋〉十一日

高し山松の風かとき、ゆけば

よる磯波の音にぞ有ける

あしるのわたりを渡らせ給ふ

とき雨いとう降て物わびしく

舞坂にあがらせたまひ浜松へと

いそがせ給ふに雨やみぬれば

ゆふ日かげとよはた雲に色はえて

かな

あめも心もはれて行そら

結句はれてゆくそらいやしき

〈千蔭〉十一日

あらし

○高し山松の風かとき、行ば

五 四 辺の

よる磯波の音にぞ有ける

あしるのわたりを渡給ふ

ころ雨いたふ降出て侘びし

舞坂のきしに着せ給ひ

ければ雨やみて

○ゆふ日かげうつろふ雲の色ぞてる

と見む

る、見

雨も心もはれて行そらに

〈保明写本〉十一日

高師山まつあらしと聞ゆけば

いそべの浪のよるにぞありける

あしるのわたりを渡らせ給ふ

とき雨いとう降て物わびしく

舞坂にあがらせたまひ浜松へと

いそがせ給ふに雨やみぬれば

ゆふ日かげとよはた雲に色はえて

あめも心もはる、そらかな

ここでの長秋の指示は言葉の表現に対するものである。それに

対し、千蔭は歌の構成を変える指示を入れている。その結果、四句と五句を入れ替え、「よる磯波の音」↓「磯辺の浪のよる」と写本では改められている。

そもそも、この『秋の道草』という歌集はどのような意図で編纂されたのだろう。

思えば、前述の『吉岡の日記』は、文化元年（一八〇四）に藩主池田斉邦の妹二人（完子・三津子）が吉岡温泉に行った際の紀行文であるが、これは池田家に献上されている。この書も献上前に草稿本が作られ、保明は衣川長秋に添削を依頼している。

ほかに稲葉文庫には保明の次の紀行文が残っている。

- (一) 東行日記 寛政六年（一七九四）
- (二) 寛政九巳歳詠草（木曾紀行） 寛政九年（一七九七）
- (三) 寛政十とせの日記 寛政十年（一七九八）
- (四) 寛政十二申年帰路日記 寛政十二年（一八〇〇）
- (五) 享和三年日記 享和三年（一八〇三）
- (六) 米子紀行 文化二年（一八〇五）
米子行おぼえ書（長秋添削の浄書本）
- 米子往還の記（推敲浄書本）
- (七) 東路日記 文化二年（一八〇五）
東路日記（長秋添削）
- (八) 文化貳丑歳東行筆記 文化二年（一八〇五）
- (九) 文化参吾妻帰途筆記 文化三年（一八〇六）

管見の範囲であるが、橘千蔭に添削を依頼したのは、「秋の道草」のみであったようである。以降、和歌の指導は長秋を頼ったらしく（六）米子紀行と（七）東路日記には長秋の添削が残されている。恐らくこれらの清書本は同様に池田家に献上されたか、または「米子往還の記（推敲浄書本）」のように複数の人によって書写された可能性もあるだろう。

まとめ

近世の和歌を鑑みたとき、堂上歌人の歌会・題詠歌、国学者の学問的な詠歌が多く残り、注目される。しかし、実際に和歌を詠み、和歌人口を支え、詠歌の営みを続けた人々ほどのような人であったのか。近世武家の和歌というものはもっと注目されるべきではないだろうか。大名家の和歌、国学者の和歌などの研究は近年着実に進んできているが、仕事柄旅をすることも多かった大名家の家臣たち、また近世後期に入って、各藩に広がった国学者達の和歌指導の具体がどうであったのか、その資料の一端が本稿で紹介した「秋の道草」のような参勤交代の傍らで読まれた詠草である。鷺見保明の資料からは、職業歌人ではないが、職務の傍ら熱心に和歌を詠み、書状によるネットワークを作り上げ、公務のついでに歌枕・名所に思いをはせ、添削指導を受け研鑽にいそしむ生活がほの見えてくる。

国学者・歌人のネットワークが全国に広がる江戸後期、和歌の享受層の一角を担ったのは、この鷺見保明のような公務の傍ら和歌に

いそしむ人々であったといえるだろう。紙幅に限りもあり、本稿ではまだその一端の紹介にとどまるが、順次これらの資料を紹介しつつ、各地を結ぶ文通・添削・収集による文化的ネットワークの解明を続けていく予定である。

*最後に資料の閲覧利用を許可下さいました諸機関及びご助言くだ

さいました各位に篤く御礼申し上げます。

また、本稿は東洋大学井上円了研究助成を受けての研究の一端でありますことを報告いたします。

「秋の道草」上巻と添削 翻刻

※見せ消ち（点）部分は傍線とし、濁点は稿者による。できるかぎり上下対照をこころがけたが、ずれた部分もあることをご了承ください。

<p>「秋の道草 上」写本</p> <p>享和のはじめのとしと いふ年の八月</p> <p>我君あづまの 大坂のみもとに 参り給はんとて 予も御ともに めされてことに都への御使の こと承りて</p> <p>君に一日先たちて廿七日</p> <p>うち立むとするに此ほど</p> <p>雨しきりに降て其日迄も</p> <p>なほやまざりければ</p> <p>きみがゆく道ひらきにとたつ我を 八重のあま雲さへずもあらなん</p> <p>廿七日 今朝は雨もやみて鳥取を</p>	<p>橘千蔭添削</p> <p>享和と改りし年の八月 廿日あまり八日</p> <p>行給ふとて 我君あづまへと旅立ちをされ</p> <p>たまふやつがれも御供に ぬ</p> <p>召加え給ひことに都への こと 承りて ひとひ 御使の 信を蒙りて一日 君に 立て廿日あまり七日 御先に打立むとす此頃</p> <p>此 しきりに降て</p> <p>雨風ひまなきまゝに廿六日 なほやまざりければ 道祖神にもふで</p> <p>○君がため道をひらきてゆく我ぞ あめ風やみて障りあらずな ○もとよりも道しる神ときくからは 海山川の旅守りませ</p> <p>廿七日天気よし</p>	<p>衣川長秋添削</p> <p>廿六日</p> <p>君に先立て明日うち立むと するに此比雨しきりに降 ければ</p> <p>ゆくゆ にとたつ を 君が為みちをひらきてゆく我ぞ 八重の さ かな</p> <p>あま雲はれてさへずもあらなん まう</p> <p>道祖神にもふて、 玉ほこの なたむけをそする もとよりも道しる神と聞かからに つ つ なく らんと わかゆきかへる旅守りませ</p> <p>廿七日</p>
--	--	--

出立ぬ。手紙わかちてもなを
うしろかげ見ゆるまでとや

立休ひし人々もつひに

かげ隠れぬ

蔭道にいま入なんとかへりみて
みおくる人に又わかれにき

笹かほなといへる所を過て

信濃なる木曾のみさかのさかしさを

おもひくらべてゆく山路かな

廿八日

知頭の駅を出てそらをうち

ながめつ、

わが君の旅たつけふは心して

風ふきはらへ村雨の雲

」

山田にたてる仮庵をみて

やま田もるかり庵をみても情なく

あつめおさむる人は人かは

心あてにそふが滝を望て

に染む

○立田姫秋はことなる色をそふか

ま 給は

たきのしら糸それと見わかず

廿八日

知頭の屋どりを出るに雨

すこし降ければ

○わが君の旅立けふは心して

やよ村時雨ふらずもあらなん

つゝら折なる坂をのぼりて

顧れば鳥取のかたより

晴る、見ゆるいと嬉し

山田にある磯が仮庵をみて

二もしくをよしと

○雨ももり風もさ、へぬ秋の田の

かりほに長き夜やあかすらん

○うしとだにいはで聞こそ哀なれ

人すむべくもあらぬ仮庵

○山田もるかり庵を見てもなさげなく

あつめおさむる人は人かは

風ふき候

そふが滝を心当に望て

にしきにおりつるや せん

立田姫秋はことなる色をそふか

たまと見えぬ たへて見ゆらん

たきのしら糸それと見えわかず

廿八日

知頭の駅を出て雨もよの

うち

そらをななめつ、

の

我君が旅立けふは心して

風ふきはらへ八重の雲はれて

やよむら雨のふらずもあら南

山田に立る仮庵をみて

そたをあらみ露にぬれつ、

雨ももり風もさ、へぬ秋の田の

かりほにひとり夜をあかすらん

露もるを と

うしとだにいはで聞こそ哀なれ

人居るべくもあらぬ仮庵に

思ひやれ

山田もるかり庵を見ても情なく

民はぐ、まぬ

あつめおさむる人は人かは

<p>廿九日 平福を出て宇和津へとゆく 道のへに玉しく露えもいは れず</p> <p>朝ぎりをわけつゝ、下る山ぞひの かやの、原は露さかりなり</p> <p>三日月の駅を過て ふるさとのいなばの山もみまさかも こえてはりまを三日月の森</p> <p>晦日 柿本明神にまうて、 ながめせしそのいにしへの秋の月 あかしの浦になほやすむらん</p> <p>うらを見さけて</p> <p>ともし火の明石のうらの夕なぎに うすきりわたる淡路しま山 浦田にやどりて礎をきゝて</p> <p>ながきよをあかしのうらの浪まくら ねられであまも礎うつらん</p>	<p>廿九日 平福を出て宇和津へと ゆく道の辺りに玉しく露 えもいはれず</p> <p>○朝霧をわけつゝ、下る山添の かや野が原は露さかりなり</p> <p>三日月の駅を過て ○因幡山みまさか越てはりまがた や 過けむ</p> <p>けふ三日月の森を見しにや</p> <p>晦日 人丸の御社にもふで、 ○詠てし其いにしへの秋の月 あかしの浦になほやすむらん</p> <p>ふり 見 浦を見さけて れや</p> <p>○見るめありか明石のうらの夕平に うす霧わたる淡路しま山 明石のほとりととまりて 礎をきく</p> <p>○ながき夜をあかしの浦の浪枕 ねられであまも礎うつらん</p>	<p>廿九日 平福を出てうわつへと ゆく道の辺に玉しく 露えもいはれず</p> <p>朝霧をわけつゝ、下る山そひの かや野が原は露さかりなり</p> <p>三日月の駅を過て 故郷の の も も</p> <p>いなば山みまさか越て播磨がた けふ三日月の森を見しにや</p> <p>晦日 まう 柿本明神にもふて、 せ 詠てし其いにしへの秋の月 あかしの浦に猶やすむらん</p> <p>浦を見さけて</p> <p>ともし火の 見るめありな明石の浦の夕なぎに うす霧わたる淡路しま山 浦田にやどりて礎をきく</p> <p>あまの子の ながき夜をあかしの浦の浪枕 しほ風さむく ころも 也 せまられて蟹もきぬた打らん</p>
--	--	---

九月朔日

すまにて

色かへぬ須磨のうらわの磯馴松
なれみし人はいづちいにけん

二日

昆陽の池水草はふかくしげれども
なほいにしへのかげは見えけり

けふ西宮より伏見まで十二里
あまりなるが昼よりあめ降
出て道なやめり。伏見にいたり
けるは亥の刻ばかりなり

親の子を伴ひ出てゆくたびの
こゝろもやみの道ぞわびしき

三日

都へ御使にまゐのぼりて堀川
といふ所にてかはいひなどたふべ
けるついでに近き辺りなれば
神泉苑の跡を見まかりて

九月朔日

舞子が浜より浦つたひ
して

○四の時はればかはる見るめありて
すまあかしこそいつもあかれね
れど
二日
昆陽にてよめる

の

○昆陽寺やこやの池水今もなほ
のこるむかしの跡ぞ見えけり

けふは西の宮より伏見まで
十二里あまりしかも昼
より雨降出て道わるく
そが上に浜の堤きれて
舟にて越す所などありて
伏見に着しは亥の時

ばかりなり次男なりける
公徳を伴ひければ道にて
おもひつゝけるに
○親ごゝろ子を伴ひてぬば玉の
をぞたどるのさ

三日

都へのぼり公卿方への
御使つとめしつゝ
神泉苑とて案内して
人の見えければ

九月朔日

舞子が浜より浦つたひして
そのをりく

四の時はればかはる見るめありて
下上ぬ
すまあかしこそいつもあかれね
二日

昆陽をゆきがてに
水草しげれるの面に

こや寺やこやの池水今もなほ
かげ

残るむかしの跡ぞ見えけり
けふ西宮にあまりしかも昼より
雨降出て道あやまり
伏見に至りしは亥の刻
なりけらし

の 出 今橋
親心子を伴ひてぬば玉の
心も の

よるのやみゆく道ぞわびしき
九月三日
まゐのぼりて
都へ御使に参る堀川

といふ所にてかはい など
ついで
とふへけるに近き辺り
なれば神泉苑の跡
まゐり

を見て

<p>いにしへのみその、の池の水清み 龍の宮居は今も残りり」 四日 けふよりみともしてゆくに 逢坂山を越るとて かぎりなき君の恵にあふ坂の 関の戸さ、ぬ御代のしづけさ 五日 三井寺に参りて</p> <p>さゝ浪や大津の宮はうつるとも むかしながらの三井の古寺 六日 すゞか山こ、しき坂を越ゆきて 名におふ関にとまる旅人 七日 石薬師の駅のひがし山辺村と いふ所に赤人の旧跡あり 峯に生る老木の松にことゝはむ やま辺のさとのむかししるやと 八日 桑名より御舟よそひて漕 出すほどに舟子ども歌うたひ 艀拍子につゞみ打あはせて いとうるはしく佐屋へとわたらせ 給ふ。御ふねのやぐらへとりて</p>	<p>のながれ ○いにしへの御そのか今も池水に それ 龍の宮居は猶残りつ、 四日 けふより御供に侍る逢 坂山を越ける時よめる ○治れる代にあふ坂は関もゐず 音羽の山の松のしづけさ 五日 三井寺見めぐらせ給ふ 何となふ古を懐ふ心 おこりて</p> <p>○さゝ波や大津の宮はうつれども むかしながらの三井の古寺 六日 ○すゞか山こ、しき坂をこえつれば おのれと関にとまる旅人 七日</p> <p>桑名の君より待もふけ たまひし御舟にめして 佐屋川をのぼらせ給ふ ほどに舟屋ぐらにありて よもを見はらして</p>	<p>ののの向 いにしへのみそのなりしか池水に 龍の宮ゐは猶残りつ、 四日 逢坂山を越とて かぎりなき きみのめぐみに 治れる代にあふ坂は関もゐず 関の戸さしぬ御代 音羽の山の松のしづけさ あふ坂 音羽山はあはせいか、 五日 三井寺へ御供にて参る さゝ波や大津の宮はうつれども むかしながらの三井の古寺 六日 すゞか山をこえ給ひ里に やどらせ給ふまゝ、同じ とて 所に仮寐も ゆきて</p> <p>すゞか山こ、しきさかを越つれば 名におふ やどる おのれと関にとまる旅人 七日 くわ名 よそひ 宮より御舟かさり立て 漕出すほど 舟うた唱ひ ツゞミ つれ艀拍子に大鼓うち</p>
---	--	--

<p>見わたすにひろき川辺の けしき類ひなくおもしろければ そら晴てあけのそほ舟漕のほる さやのわたりは見れどあかぬかも</p> <p>宮にやどらせ給ふ夜寒の里」 寐覚のさとみな此あたりなれば 秋風のよさむのころも爰にきて ねざめにしのお故さとのそら 熱田大神宮を拜て 君が旅路やすくと祈るこゝろをば めぐみあつたの神ぞしるらん</p> <p>九日</p> <p>菊の酒くみかはしつゝ、ふるさとに けふは常よりおもひ出らん</p> <p>十日 矢はぎ大屋豊川のはしを こえて 国の名の三の川橋けふこえて おもへばながき東路のそら」</p>	<p>○そら晴てあけのそほ舟さしのほる 佐屋の川辺は見れどあかぬかも いと古体 候</p> <p>八日 暁ふかく起みて此あたりに 夜寒のさと寐覚の里 などあるをおもひて</p> <p>○秋風の夜寒のころもこゝにきて ねざめにおもふ故さとのそら 熱田の宮を拜して</p> <p>○君が旅路やすくと祈る心をば やか</p> <p>めぐみあつたの神ぞしるらん</p> <p>九日</p> <p>四 人や 三 猶 いづ けふはこと更おもひこすらん 池鯉鮒のあたりに八橋の 古跡なりとぞ</p> <p>十日 ○国の名の三の川橋けふこえて おもふも長き旅のそらかな</p>
<p>合とていと賑しく佐屋 へとわたりせ給ふ御舟の わた 艫へのほりて見晴すに ひろき川辺のけしき なくおもしろければ また類ひあらじかし そら晴てあけのそほ舟こぎのほる さ屋のわたりはみれどあかぬかも 「古体也</p> <p>八日 宮にやどらせ給ふ夜寒の 里寐床の里みな此あたり なれば 秋風のよさむのころも爰にきて しの ねざめにおもふ故さとのそら 熱田大神宮を拜て 君が旅路やすくと祈るこゝろをば めぐみあつたの神ぞしるらん しるらん能かなへたり</p> <p>九日 重陽なれば 菊の酒くみかはしつゝ、故里に 常より いづ けふぞこと更おもひこすらん 八橋のありけるあと、し つたへたるあたりを過ぎて</p>	<p>○菊の酒くみかはしつゝ、故さとに 三 猶 いづ けふはこと更おもひこすらん 池鯉鮒のあたりに八橋の 古跡なりとぞ</p> <p>十日 ○国の名の三の川橋けふこえて おもふも長き旅のそらかな</p>
<p>合とていと賑しく佐屋 へとわたりせ給ふ御舟の わた 艫へのほりて見晴すに ひろき川辺のけしき なくおもしろければ また類ひあらじかし そら晴てあけのそほ舟こぎのほる さ屋のわたりはみれどあかぬかも 「古体也</p> <p>八日 宮にやどらせ給ふ夜寒の 里寐床の里みな此あたり なれば 秋風のよさむのころも爰にきて しの ねざめにおもふ故さとのそら 熱田大神宮を拜て 君が旅路やすくと祈るこゝろをば めぐみあつたの神ぞしるらん しるらん能かなへたり</p> <p>九日 重陽なれば 菊の酒くみかはしつゝ、故里に 常より いづ けふぞこと更おもひこすらん 八橋のありけるあと、し つたへたるあたりを過ぎて</p>	<p>合とていと賑しく佐屋 へとわたりせ給ふ御舟の わた 艫へのほりて見晴すに ひろき川辺のけしき なくおもしろければ また類ひあらじかし そら晴てあけのそほ舟こぎのほる さ屋のわたりはみれどあかぬかも 「古体也</p> <p>八日 宮にやどらせ給ふ夜寒の 里寐床の里みな此あたり なれば 秋風のよさむのころも爰にきて しの ねざめにおもふ故さとのそら 熱田大神宮を拜て 君が旅路やすくと祈るこゝろをば めぐみあつたの神ぞしるらん しるらん能かなへたり</p> <p>九日 重陽なれば 菊の酒くみかはしつゝ、故里に 常より いづ けふぞこと更おもひこすらん 八橋のありけるあと、し つたへたるあたりを過ぎて</p>

<p>十一日 高師山まつのあらしと聞ゆけば いそべの浪のよるにぞありける あしゐのわたりを渡らせ給ふ とき雨いとう降て物わびしく 舞坂にあがらせたまひ浜松へと いそがせ給ふに雨やみぬれば」</p> <p>ゆふ日かげとよはた雲に色はえて あめも心もはるゝそらかな 十二日 朝とく浜松を出て植まつの はらを過るとて たがせにか千年のたねを植松の 木かげをわれもとはにかよはん」</p> <p>十三日 ふるさとに便あれば つげやらんさやの中山さはりなく 大る川をもけふわたりぬと 岡部といふ所にやどりて 長月のこよひの月を松たてる をかべのさとに又や来てみる」</p>	<p>十一日 あらし ○高し山松の風かとき、行ば 五 四 辺の よる磯波の音にぞ有ける あしゐのわたりを渡給ふ ころ雨いたふ降出て侘びし 舞坂のきしに着せ給ひ ければ雨やみて と見む</p> <p>○ゆふ日かげうつろふ雲の色ぞてる るゝ 見 雨も心もはれて行そらに 十二日 はま浜のさとを出て植松の はらを過るとて ○誰世にか千年の種を植松の ぬ所 ふかめて はしは常磐にみどり成らん 十三日 故さとに便あれば ○告やらんさやの中山障りなく 大る川をもけふしこえぬと 岡部にやどりて ○長月のこよひの月をしら露の おかべのさとに又や来てみる ○秋ふかく露もおかべの草の原 むかふ今宵の月のあはれさ</p>	<p>杜若ことばの花ぞ残れども そこともわかず沼の八はし 十日 矢はぎ大屋豊川のはしを けふみなこえて 国の名の三の川はしけふ越て へば 旅のそらかな おもふも長き東路のたび そら</p> <p>十一日 高し山松の風かとき、ゆけば よる磯波の音にぞ有ける あしゐのわたりを渡らせ給ふ とき雨いとう降て物わびしく 舞坂にあがらせたまひ浜松へと いそがせ給ふに雨やみぬれば」</p> <p>ゆふ日かげとよはた雲に色はえて あめも心もはれて行そら かな 結句はれてゆくそらいやしき 十二日 さま也 濱松を立出て植松の をすぐるとて はらにかゝる たがよにか千年の程を植松の 原は常磐にみどり成らん 十三日</p>
---	--	---

ふるさとも今宵の月を詠つ、
わがおもふごとぞ思ふらん

十四日

草枕むすぶをかべに夢さめて
うつゝにたどる宇津の山ごえ

十五日

うど浜のうとくはあらず立とまり」
みほの浦松いつもあかなくに

岩きやまこえてそこ、にくき崎の
なみの関もり名のみなりける

雨ふり出たれど富士の峰た
うに墨にて画のごとくほのかに
見ゆれば

あし曳の山のすがたは雨ぐもの」
か、れどそらにするきふじのね

○ふるさとも今宵の月を詠つ、
わがおもふごとぞ思ふらん

十四日

○草枕むすぶ岡べの夢さめて
うつゝにたどる宇津の山越

そらよく晴て府中の
こなたより富士の峯
あらはに見ゆ

三

四 過れば

○ふじの山それとすがたは見つれども

一 二 かほして

いさしら雪のしらず言の葉

五 もなし

十五日

○うどはまのうとくはなにか見て過む
三保の浦松いつもあかなくに
さつた峠を越て望嶽
立よに入らせ給ふ

○いはき山こえてぞ思ふくき崎の
波の関守名のみなる代を
雨降出たれどふじのねは
うす墨に画るやうに
ほのかに見ゆ

○あし曳の山のすがたは雨雲の
空 ぐをも
か、れどそれとしるき富士のね

けふ大ぬ川越させ給ふらん
とて江戸よりもいなばよりも

の

文来る申し返りごとせんと
して母上のみもとへ

東路の

告やらんさやの中山さはりなく

は けり

大井川をもけふしこえぬと

さはりなく今よし也

今宵は十三夜の月なれば

の月かけを

長月の今宵の月をしら露の

を

おかべのさとに又や来てみん

白露のおくとほかなちがひなればかゝらず

秋ふく露もおかべの草のはら

むかふこよひの月のあはれさ

故さとも今宵の月を詠つ、

わを

わがおもふごとぞ思ふらん

「古体也

雨風しきりになりてふじ川

水増ぬらんといひさわげば
蒲原にはやすませたまはで
岩渕までいそぎゆきたまはん
やととひまつるに従者ども
なやみなくばなどかりそめにも
御めぐみのありがたき
御ことの葉承りて

めぐみある君のこゝろを神しらは
何かさはらんふじの川舟

岩ふぢにいたり給へば川の
つかさしける人よりとく舟に
□をたまへ御舟出なりかたく
ならんと聞ゆれば直に舟に
めしうつらせ給ふけるに水
かさ増て瀬早きことたとへん
かたなし。されど何の障りも
なく下か下まで渡り果つれば
わたりとまりぬ。元市場と
いふ所にて休らひたまひみな
人の労をいこへたまふ。此あたり
我ことに笹立わたして賑ふ
けしきなればいかなること
かと問すればけふは富士浅間の

雨しきりに降てふじ川の
水高くならんといへば

蒲原の御小休ははぶきて
岩渕までいそぎて御のり
ものすゝめんと伺ひしに
ずさどもなやみだに
なくばなど 仰ごとありて
造すにも御いつくしみの
御心あらせ給ふあり
がたさに

めぐみある君が心を神もしらば

何かさはらんふじの川舟
富士川の右の山際に
神の森といふ所あり
此神に竹川ことなく
越させ給んことを心の内に
祈りて
○障りなく舟漕わたせふじ川や
こゝに水しる神のまに／＼
何の障りなふ下り下まで
わたり果ければ川とめ
とて渡りとまりぬ。
元市場といふ所にて
御休をさせ給ひてみな
人のつかれをいこへ給ふ
此迄家ごとに笹立わたし
賑ふさまなればいかなる
ことにかと問すればけふは

祭りなりといふ。爰に桜の
返り花いと艶に咲りければ

けふまつる神の御名とて山桜」

この花さくや春ならねども

十六日

するがなるふじの芝山しばくぬに

みれどもあかぬふじのしば山

ふじの山老ずしなすの葉もが

いつも麓に宿しめてみん

十七日

公徳このほど風の心ちにて

なやみければ旅のつかれも

深くいかゞあらんなど思ふ。

あまりに三嶋明神の御前

過る時によみて奉りける

あふくぞよ祈る心をあはれみ
てしるしみしまの神の守りを」

こよひ大磯に火ともして

着せたまふ

箱根路や酒匂川をもこゆるぎの

いそぐとすれどけふは暮けり

富士浅間の祭りなりといふ。
爰に桜の返り花いと艶に
咲りければ

○けふまつる神の御名とて山桜

此花さくや春ならねども

十六日

○するがなるふじの芝山しばくぬに

見れどもあかずふじのしば山

ぬ

十七日

公徳此ほど風の心ちにて

ならずものしければ

旅のつかれも添ていかゞ

あらんなどくるしく思ひ

なやむあまりに三嶋の

明神の御前過る時に

はやく病いえなんことを

祈りてよみて奉りける

○仰ぞよ祈る心をあはれみ

てしるしみしまの神の守りを

今宵大磯に火ともして

着せ給ふ

○箱根路や酒匂川をもこゆるぎの

いそぐとすれどけふは暮けり

十八日

大山を見てもとすみし
はうきの国をおもひつゝよめる」
あさよひに見し大山とおなじ名の
山としきけばふるさとおもほゆ

十九日

御ともして江戸にいたり
着ぬ

むさし野のひろき恵みに武士の
八十氏人もこゝにつどへり」

享和元酉年九月

鷺見保明しるす」

十八日

高麗寺村もろこしが原
などいふ所をゆくるに
ことな

○いかなれば外国の名をよぶこ鳥
おぼつかなきも許にとはまし

十九日

○しら浪のあらるの崎は名のみにて

磯辺の松の風も音せず

長の旅路すこしの

障りもなく御供して

けふ八ツ時にはやしと

いふ比御館に着ぬ公德も

神の恵みに心よく成に

ければ思ふこと更になく

参り着たる とて人々

とひ集ていと賑はし候

**A Reprint of "Aki-no Michikusa" by
Sumi Yasuakira: The Correction by
TACHIBANA Chikage and KINUGAWA Nagaaki,
in the collection of TOYOBUNKO**

OUCHI, Mizue

SUMI Yasuakira is waka poet in Tottori. "Aki-no Michikusa", this anthology is waka poetry of a journey to Edo from Tottori. The poetry was corrected by two waka poets, Tachibana Chikage and KINUGAWA Nagaaki. Chikage is Kamono Mabuchi's pupil, Nagaaki is Motoori Norinaga's pupil. This archives indicates their correction method.